

国史大辞典編集委員会編

国史大辞典

2

う—お

吉川弘文館

国史大辞典 第2巻 (う～お)

国史大辞典編集委員会編

東京 吉川弘文館 1980.7

1014p 図版66枚 折り込2枚 27cm

Title entry : Kokushi daijiten

Ed. : ©Kokushi daijiten henshū iinkai, 1980.

Printed in Japan



国史大辞典 第二巻

昭和五十五年七月一日 第一版第一刷発行
平成七年六月一日 第一版第六刷印刷
平成七年七月一日 第一版第六刷発行

編集 国史大辞典編集委員会

発行者 吉川圭三

発行所 株式会社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
☎(03)3813191 代表
振替口座00100151244

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-642-00502-1

Ⓔ 〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

例 言

項 目

一 本辞典に収録する項目は、日本歴史の全領域を網羅し、さらに広く考古学・人類学・民族学・民俗学・国語学・国文学などの隣接諸分野にも及んだ。また、主要な典籍・古文書・記録や、書誌学・古文書学・史料学、史学史関係の項目も多数採取して、研究の便を図った。

二 一つの項目で、別の呼称や読みのある場合は、適宜その一つを選んで見出しを立て、他は必要に応じカラ見出しとし、その項目を指示した。

三 関連項目は、適宜その一つを選んで見出しを立て、まとめて記述した場合もある。また、総括的概観ができるよう、主題項目の中に中見出しを立てて記述する方法も用いた。

四 かな見出し

1 現代かなづかいによる「ひらがな」書きとした。

2 外国語・外来語は「カタカナ」書きとし、「ヴ」は使用せず、長音は長音符号(ー)を用いた。ただし、中国・朝鮮の人名や地名で、日本の漢字音によるものは「ひらがな」書きとした。

3 欧米人名は、ファミリーネームをかな見出しとした。

五 本見出し

1 日本読みのものは、漢字と「ひらがな」を用いた。

2 外国語は原語の綴りを用いた。ただし、ギリシャ語・ロシア語などは、ローマ字に置きかえたものを用いた。

3 日本語と外国語を合成したものは、外国語の部分を「カタカナ」書きとした。

4 外来語で漢字表記が慣用されているものは、漢字を用いた。

5 欧米人名は、パーソナルネーム、ファミリーネームの順のフルネームとし、爵位も付記した。

6 かな見出しと全く一致する場合は、本見出しを省略した。

7 中国・朝鮮以外の国名は通称に従い、英語の綴りを本見出しとした。政体名を付ける場合は「カタカナ」・漢字まじりとし、英語の綴りを付記した。

8 中国・朝鮮の地名および近代の人名は、本見出しの後に、必要に応じ原語音のローマ字綴り(中国はウェード方式、朝鮮はマッキューン＝ライシャワー方式)を付記した。

配 列

一 かな見出しの五十音順とした。清音・濁音・半濁音の順とし、また、促音・拗音も音順に加えた。長音符号(ー)は、その前の「カタカ

ナ」の母音をくり返すものとみなして配列した。

二 かな見出しが同じ場合は、本見出しの字数・画数の順とし、さら
にかな見出し、本見出しが同じ場合は、一般・人名・典籍・地名の
順とした。

三 一般・人名・典籍・地名のそれぞれの中で、かな見出し、本見出
しが同じ場合は、おおむね著名順または年代順とし、(一)(二)(三)……を冠
して一項目にまとめた。

記 述

一 文体・用字

一 漢字まじりの「ひらがな」書き口語文とし、かなづかいは、引
用文をのぞき、現代かなづかいを用いた。

二 漢字は新字体を用い、歴史的用語・引用史料などのほかは、な
るべく当用漢字内で記述した。また、必要に応じ(一)内に読みが
なを付けた。

三 数字は、漢数字を使用し、十・百・千・万などの単位語を付け
た。ただし、西暦、西洋の度量衡、百分比、統計的数値、列記さ
れる数字群、文献の編・巻・号などは、単位語を略し、桁数が多
い時は、万以上の単位語を付けた。壹・貳・参・拾・廿・卅など
の数字は、引用文などのほかには使用しなかった。横書きの場合
は、アラビア数字を用いた。

二 年次・年号・時代

一 年次表記は、原則として年号を用い、(一)内に西暦を付け加え
た。同年号が再出する場合は、西暦を省略した。

二 改元の年は、原則として新年号を用いた。

三 年号のない時代は、『日本書紀』『続日本紀』により、天皇の治世
をもって年次を表わした。また、崇峻天皇以前は、西暦の注記を
省略した。

四 南北朝時代は、北朝の年号を用い、必要に応じて南朝の年号を
(一)内に付け加えた。

五 日本の年号と、中国・朝鮮の年号を対照させる場合は、いづれ
かを主にし、他を(一)内に入れた。

六 朝鮮の紀年は、『三国史記』『高麗史』『朝鮮王朝実録』の称元法に
従った。

七 外国関係の記事で、日本と関係のある場合は年号を使用し、特
に關係のない場合は、西暦のみとした。

八 太陽暦採用(明治五年、一八七二)前の欧米との外交関係につい
ては、必要に応じ太陽暦・太陰暦の両方を掲げた。また、改暦前
は、一月とはせず、正月とした。

九 時代の称呼は、原則として古代・中世・近世・近代・現代とし
た。また、大和時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・南北朝時
代・室町時代・戦国時代・安土桃山時代・江戸時代・明治時代・
大正時代・昭和時代などの通用の時代区分も適宜用いた。

三 中国・朝鮮人、および昭和二十四年（一九四九）以前に没した日本人の年齢は、かぞえ年齢とし、そのほかは満年齢で記した。

四 記述の最後に、基本的な参考文献となる著書・論文・史料集をあげ、研究の便を図った。

五 項目の最後に、執筆者名を（ ）内に記した。

六 記号

『 』 書名・雑誌名・叢書名などをかこむ。

「 」 引用文または引用語句、特に強調する語句、および論文名などをかこむ。

（ ） 注または読みがなをかこむ。角書・割書も一行にして（ ）でかこむ。

〔 〕 小見出しをかこむ。

↓ カラ見出し項目について、参照すべき項目を示す。

↓ 参考となる関連項目を示す。

↓ 別刷図版のあることを示す。

― 区間を示す。 例…江戸―長崎

〔 〕 数の幅を示す。 例…二五―三〇センチ

・ 並列点および小数点を示す。

≡ 系図の養子を示す。

≡ 二語以上の外国語を「カタカナ」書きにしてつなぐ時に用いる。 例…ウィリアム・アダムス

／ 金石文などの引用史料の改行を示す。

国史大辞典編集委員会

編集顧問

大久保利謙
児玉幸多
小西四郎
斎藤忠
竹内理三
宝月圭吾

編集委員

坂本太郎
臼井勝美
大石慎三郎
笹山晴生
佐藤進一
関晃
高村直助
田中健夫
土田直鎮
鳥海靖
羽下徳彦
早川庄八
尾藤正英
丸山雍成
皆川完一
由井正臣

別刷図版	う	え	お
浮世絵	60	211	435
運慶	204		
画章	236		
江戸城	316		
江戸図	348		
絵馬	364		
大坂城	574		
大坂の陣	590		
大判	686		
大鎧	734		
威	734		
図版目録	1016		

図 版 目 録

2

う — お

例 言

1 この図版目録は、本冊に収載した図版を、下記の分類によって掲げたものである。

肖像	(1)
花押・自署	(3)
印章	(4)
紋章	(5)
文書	(5)
典籍	(6)
新聞・雑誌	(8)
絵画	(8)
絵図	(9)
地図	(10)
仏像	(10)
建築	(11)
船	(11)
遺物	(12)
遺跡・史跡	(13)
その他	(13)

カラー別刷図版	
浮世絵	(16)
画章	(16)
江戸城	(16)(17)
江戸図	(16)(18)
絵馬	(16)(19)
大坂城	(16)(19)
大坂の陣	(16)(20)
大判	(16)
大鎧	(16)(21)
威	(16)

モノクロ別刷図版	
運慶	(16)(21)

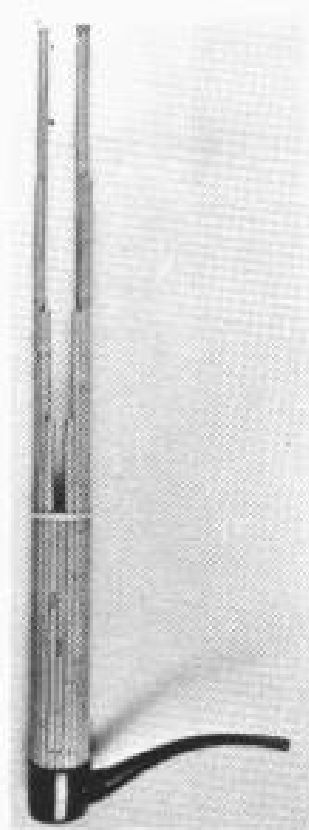
2 記号・略号

- 国宝
- ◎ 重要文化財
- 重要美術品
- 〔特史〕 国指定特別史跡
- 〔史〕 国指定史跡

- 〔絵〕 肖像画
- 〔彫〕 肖像彫刻
- 〔写〕 肖像写真

う

う 竿 雅楽用の管楽器。木製の壺(匏)ふくべ(という)の縁をめぐらして十七本の竹管をたてたもの。構造は後世の笙(しょう)とほとんど変わらないが、笙より大きく、笙より全体に一オクターブ低い音を出す。今日正倉院御物の中に呉竹竿(全長八七^サ)、呉竹竿(銘「東大寺」、全長七八・八^サ)、斑竹竿(銘「東大寺」、全長九一・八^サ)の三個の竿が残存する。ともに十七管を有する。中国においては、三十六管、十九管などと管数の多い竿もあったが、唐代の俗楽の竿は十七管で、それが日本に伝来したと考えられる。吹口に吸い飲み状に長く湾曲した管がついていることは今日の笙と異なる。竿は雅楽が渡来した奈良時代から平安時代初頭にかけては用いられたが、その後行われたいわゆる平安朝の楽制改革により、楽器編成が変わり、用いられなくなった。近代になって昭和の初め、多忠朝が「昭和楽」懐古などの新作雅楽の中で、また昭和四十五年(一九七〇)には黛敏郎が「昭和天平楽」の中で復活使用を試みた。↓笙(しょう)



呉竹竿

【参考文献】 正倉院事務所編『正倉院の楽器』、林謙三「正倉院楽器の研究」

(蒲生美津子)

うあんご 雨安居 ↓安居(あんご)
うい 雨衣 ↓あまぎぬ

ウィーン=アピール *Wien Appeal* 一九五五年(昭和三十)一月十八・十九の両日、世界平和評議会はオーストリアの首都ウィーンで拡大執行局会議を開催し、核兵器使用についての北大西洋条約機構(NATO)理事会の決定に反対して、平和擁護運動の任務、全平和愛好勢力のパリ協定批准反対闘争、そのほかについて討議し、同会議議長ジョリオ・キュリー^リの提案になる「われわれは原子戦争を準備するすべてのものに反対し、すべての国における原子兵器貯蔵の破壊とその製造の即時中止を要求する」という「原子戦争準備反対の訴え」を議決し、その署名運動をおこした。これがウィーン=アピールと呼ばれるもので、この会議には、日本からは安井郁(原水爆禁止署名運動全国協議会事務局長)と西園寺公一が出席した。日本での署名運動は、三・一ビキニ被爆事件以後もあがった原水爆禁止運動とむすびついて行われ、署名数は約二百万に達し、全世界では六億八千八百万以上に達した。

【参考文献】 日本平和委員会編『平和運動20年資料集』、同編『平和運動20年運動史』

(藤井 松二)

ウィーンばんこくはくらんかい ウィーン万国博覧会 明治六年(一八七三)オーストリアの首都ウィーンで開かれた博覧会。日本政府はこれに参加することに決し、同四年十二月参議大隈重信・外務大輔寺島宗則・大蔵大輔井上馨に博覧会御用掛を兼ねさせ、のち工部大丞佐野常民をこれに加え、翌五年二月正院に事務局を設け、十月大隈に総裁、佐野に副総裁を兼ねさせ、六年一月佐野副総裁(并理公使に任じ、イタリア・オーストリア両国在勤を命ぜらる)ら二十三人を差遣した。農業界の先覚者として知られる津田仙も差遣され、同

ウィーン万国博覧会(イラストレイテッド・ロンドン・ニュースより)



地で選挙により万国審査官に列した。政府はまだ財政的基礎が確立していなかった時代に六十万円という巨費を投じて事業を遂行し、巨額な出品をした。これによって日本品の海外宣伝の目的が果たされたばかりでなく、伝習職工らがもたらした軽工業生産技術によってわが産業界が大いに発展した。明治維新後、国家として海外博覧会に参加した嚆矢であり、当時の為政者がいかに殖産興業政策を重視していたかがうかがわれるとともに、生産技術の急速な進歩によって、内国博覧会事業の端緒となった。

(吉田 常吉)

ウィグモア *John Henry Wigmore* 一八六三—一九四三 アメリカの法律学者。一八六三年三月四日、アメリカ、サンフランシスコに生まれる。八七年ハーバード大学を卒業して法学を修め、同年から八九年までボストンで弁護士を開業した。明治二十二年(一八八

九慶応義塾大学法律科の主任教授として来日、同二十五年まで在職して英米法を講じ、法律学科育成に貢献した。かたわら日本の法制史の研究をした。一八九三年以後ノースウェスタン大学法学教授となり、一九〇一年から二九年まで法学部長をつとめ、名誉教授となった。昭和十年(一九三五)再び来日、東京帝大・慶応義塾などで法制史の講演をなし、また江戸時代法制史資料を集めた。一九四三年四月二十日、シカゴに没した。八十歳。英米証拠法の権威であり、江戸時代の法制に関する著述もある。著書に *Materials for the Study of Private Law in Old Japan* (1892); *Treatise on Evidence* (10 vols., 1904—05, 1923, 1940); *Pocket Code of Evidence* (1909); *A Panorama of the World's Legal Systems* (1928, 36); *Kaleidoscope of Justice* (1941) などがある。

【参考文献】 大久保利謙編『外国人の見た日本』三、高柳賢三「ウィグモア先生の人格と業績」(帝国大学新聞社編『文化と大学』所収)、平良「J・H・ウィグモア博士関係文献目録」(慶応義塾大学『法学研究』三一ノ二・三合併号)

(重久篤太郎)

ういこうがい 初筓 ↓着裳(ちゃくも)

ういこうぶり 初冠 男児の成人式として元服の儀が行われ、そこで美豆良と呼ばれる少年の髪型を切り改め、大人の服装に変え、それまで頂を露わにしていた(無帽)のをやめ、初めて冠をかぶることをいう。元服はまた冠礼・首服・首飾・御冠(みこうぶり)・冠などともいい、通過儀礼中もっとも重要な儀式であった。元服したためにかえって見劣りすることを文学作品には「あげおとり」「元服おとり」といい、その反対語を「あげまさり」と表現しているが、これも成人式としての元服が外見上からも大きな変化をもたらしたことを示す。天皇元服の場合は加冠・理髪・能

毛利輝元加冠状



冠の三役があり、加冠はもっとも重要な役であった。冠者の髪をとって冠の中に引き入れるところから「引入」ともいう。太政大臣があたり、太政大臣がいない時は特に任命される。理髪役は加冠に先立ち空頂黒幘（くうちやく）を二重にして花形に作り、紫の紐を左右に付けた頂のない冠を脱がせ加冠の後、櫛で髪を理する役で、左大臣もしくはこれに準ずる者が奉仕した。能冠ははじめに空頂黒幘を頭に加える役で、能は堪能の意、櫛でそれまでの美豆良を解き元結で髪を結び、笄刀（たけながたな）で髪末を切る。内蔵頭がこれにあたる例が多い。以上は天皇の例であるが、皇太子の場合は能冠はなく、親王以下は空頂黒幘もない。皇太子の加冠には傳があたり、理髪には大夫または権大夫、親王以下では徳望ある人を選んで行う。摂関家の

子弟などは殿上で元服し、天皇みずから加冠役をされることもあった。加冠は鎌倉将軍家では北条氏、室町将軍家では管領、徳川将軍家では井伊氏などの名家がその任にあたり、武家一般もこれに準じた。元服には公家では放巾子（はなちんこ）または抜巾子（ぬきちんこ）と呼ばれる冠が用いられたりした。加冠と同時に命名、位階を進められる。武家では烏帽子が用いられ、烏帽子親・烏帽子子の名は後世までひろく行われた。↓烏帽子親（えぼしおや）↓元服（げんぷく）

【参考文献】『古事類苑』礼式部一、中村義雄『王朝の風俗と文学』（『塙選書』二二）

（中村 義雄）

ういざん 初参 むしよさん

ういじん 初陣 武士が生まれて初めて戦闘に参加すること。陣始（じんはじめ）ともいう（『総見記』）。源頼朝の初陣は十三歳の時で、平治の乱に参加した。建保元年（一一二三）和田氏の乱には、長尾定景の子で元服前の江丸が十三歳で参戦したが、敵兵は弓を向けなかった（『吾妻鏡』）。個人差はあるが、一般に元服前の初陣を過早としたことを示すものである。戦国時代甲斐国の武田氏は家臣の初陣を十六歳と定めたと伝えられる（『甲陽軍鑑』）。なお戦開開始を意味する軍始（いくさはじめ）という語を初陣の意味に使うことがある。

（石田 祐一）

ウイッテ Sergei Yulievich Vite ヲンッ

ウイットオースほう ウイットオース砲 英人ウイットオースが一八五四年に特許を得た断面正六角形の特種なライフルをもつ前装施条砲で専用の六角柱形をした弾丸を使用した。その特長は少量の火薬をもって大射程を得るところにあり、弾速および命中精度について非常な好評を博した。さらに六〇年、後装式が開発されたが不評のため再び前装式に戻った。

わが国では三十二斤、十二斤および一斤野戦砲の三種の前装砲が、海軍に採用され六角砲と呼ばれたこともあったが、砲腔内の磨損がはなはだしくほどなく名声を失った。

【参考文献】有坂紹蔵『兵器沿革図説』（『東京帝国大学工科大学紀要』七ノ一）、小山弘健『近代軍事技術史』（所 荘吉）

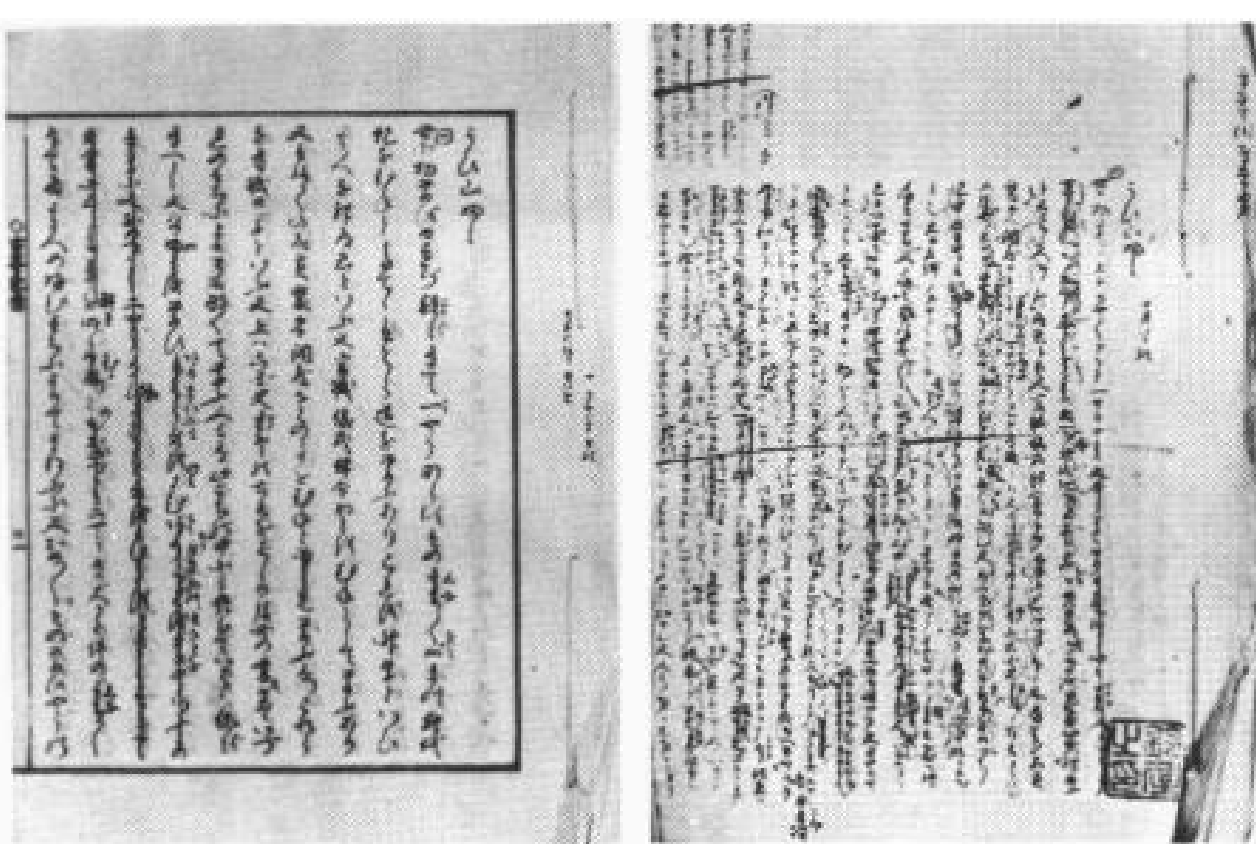
ういはくじゅ 宇井伯寿 一八八二—一九六三 大正・昭和時代の印度哲学・仏教学者。愛知県宝飯郡御津（みと）で明治十五年（一八八二）六月一日に生まれた。幼名茂七、十二歳の時、檀那寺の東漸寺に入って得度し、名を伯寿と改めた。第一高等学校を経て同四十二年七月、東京帝国大学文科大学印度哲学科を卒業。同大学院において高楠順次郎教授のもとに研究を重ね、曹洞宗大学講師となり、大正二年（一九一三）より同六年まで同宗海外留学生として欧州に学んだ。同八年東京帝国大学講師、同十二年東北帝国大学教授、昭和五年（一九三〇）東京帝国大学教授に転任、翌六年には『印度哲学研究』六巻によって帝国学士院賞を受賞した。同十八年定年により同大学退官、同二十年に帝国学士院会員に選ばれ、同二十八年に文化勲章を受けた。また駒沢大学教授・同学長・名古屋大学講師等の諸大学の教授・講師も兼ねた。印度哲学・仏教学研究に多大の業績を遺し、『仏教汎論』『撰大乘論研究』などの多数の名著がある。昭和三十八年七月十四日、神奈川県鎌倉市二階堂の自宅で没す。八十一歳。多磨墓地に葬られた。のち、東漸寺にも分骨埋葬。

【参考文献】宇井伯寿『インド哲学から仏教へ』（古田 紹欽）

ういやまぶみ 宇比山踏 本居宣長が、初学者のために国学の精神とその研究を平易に説いた学問論。一冊。書名は、はじめて学問に入ることを、登山に譬えたもの。寛政十年（一七九八）に成り、翌年刊行。はじめに綱領的な本文を掲げ、続いて本文中に合印（あいじるし）を付した二十九項を詳説している。まず学問の概念について考え、従来学問といえは漢学をさし、わが国の学問を和学・国学などと呼ぶのは顛倒の見であるとし、わが国の学問をこそただ学問と呼ぶべきであるとして、その意味の学問を神学・有識（ゆうそく）の学・歴史記録の学・歌の学びの四科に分け、中でも



宇井伯寿



『宇比山踏』 (左)初稿本 (右)再稿本



ウィリアムズ

道の学問を主とすべきであるとし、ついでそれぞれその学問の研究法について、詳細に論述している。近代的な学術の理論的な精しきには及ばないとしても、既成の理論に頼ることなく、その国学の方法をきりひらいた宣長の深い体験に裏づけられている点に、わが国学問論の古典としての本書の価値がある。『本居宣長全集』一、『石波文庫』、『日本思想大系』四〇などに収められている。(大久保 正)

ウィリアム・アダムス William Adams ↓
アダムス

ウィリアムズ Channing Moore Williams
一八二九—一九一〇 米国聖公会(内外伝道協会)派遣の宣教師。日本聖公会初代主教。立教大学・立教女学院などの創立者。一八二九年七月十八日アメリカ、バージニア州リッチモンドに生まれる。ウィリアム・アンド・メリー大学、バージニア神学校卒業。J・リギンズと中国で活躍。のち日本最初のプロテスタント宣教師の一人として安政六年(一八五九)六月五日長崎に上陸した。しかし当時は禁教下だったので日本語の習得に努め、宣教開始に備えた。慶応元年(一八六五)中国と日本の主教となる。明治二年(一八六九)十月大坂へ移り、私塾をひらき英学を教える。同六年二月切支丹禁制の高札が撤去され、同年十一月東京へ移る。以後同四十一年四月帰国するまで、キリスト教の宣教と教育に献身した。常に粗衣・粗食に甘んじ、聖徒の面影があったといわれる。一九一〇年十二月二日、生まれ故郷で死去。八十一歳。生涯独身を通じた。

たといわれる。一九一〇年十二月二日、生まれ故郷で死去。八十一歳。生涯独身を通じた。

参考文献 元田作之進『老監督ウィリアムズ』、松平惟太郎『日本聖公会百年史』、佐波巨編『植村正久と其の時代』、徳重浅吉『維新政治宗教史研究』、『立教学院百年史』、安藤美登里・力武葉子・五十嵐睦子『C・M・ウィリアムズ』、『近代文学研究叢書』一二所収)、矢崎健一『C・M・ウィリアムズの翻訳と著書』、『キリスト教史』一六、伊沢平八郎『C・M・ウィリアムズについて』(同) (伊沢平八郎)

ウィリアムズ Samuel Wells Williams
一八二二—一八八四 米国伝道会社所属の宣教師。中国研究者。一八二二年九月二十二日生まる。三三年中国に渡り、広東で『中国叢書』、『The Chinese Repository』の編集にあたる一方、澳門(マカオ)で日本の漂流漁師より日本語を学んだ。天保八年(一八三七)日本人送還のモリソン号に乗り組み、江戸湾で撃退された。嘉永六年(一八五三)ペリー艦隊の通訳として来日。翌年たまたま吉田松陰海外脱出に出会った。松陰は彼の日本語をほめていた。安政五年(一八五八)長崎滞在中オランダ人ドンケルックルティウスよりの報に同じく滞在中のサイルとウッドと連絡し、米国監督・米国改革・米国王長老教会最初の宣教師派遣のきっかけをつくった。のちエール大学で教えた。一八八四年二月十六日没。七十一歳。著書に『中国総論』、『The Middle Kingdom (1848)』、『ペリー日本遠征随日記』、『新異国叢書』八所収) A Journal of the Perry expedition to Japan (1910) などがある。

参考文献 Frederick Wells Williams, ed., The life and letters of Samuel Wells Williams (1889); Frederick Wells Williams, ed., The Journal of S. Wells Williams, Journal of the North-China Branch of the

Royal Asiatic Society, vol. 42 (1911).

(大内 三郎)

ウィリス William Willis
一八三七—一九四イギリスの医学者。一八三七—一八四のフェルマナー州フーレンス・コートに生まれ、エジンバラ大学で医学を学び、五九年に卒業。翌六〇年五月、ロンドンのミドル・セックス病院の医員となり、一年半の間在職した。文久元年(一八六二)末に江戸のイギリス公使館の医官として来日。生麦事件・薩英戦争には負傷者の手当に活躍、これが機縁となって鹿児島藩と密接な関係を結ぶこととなり、明治元年(一八六八)正月の鳥羽・伏見の戦に際しては同藩の依頼に応じて京都相国寺の鹿兒島藩軍陣病院で負傷者の治療にあたった。その後いわゆる維新戦争の時に各地(横浜・東京・越後高田・柏崎・新発田)の軍陣病院に出張して多数の負傷者の治療にあたり、切断手術・弾丸摘出術をも行なった。戦乱平定後、同二年三月、医学教師に任ぜられ、兼ねて東京府大病院医官となったが、同年に日本政府のドイツ医学採用の方針が定まったため、西郷隆盛の斡旋によりその年末に鹿児島に赴き、医学校と病院を開設した。同十年まで医学教育と患者の診療にあたり、また鹿児島地方の公衆衛生を指導した。同年イギリスに帰り、同十四年再び来日したが、間もなくイギリスへ戻った。その後イギリス王立外科学会会員となり、一時開業した。一八八五年バンコック駐在イギリス公使館医官となり、九二年まで在職した。九四年二月十四日故郷で病氣のため没した。

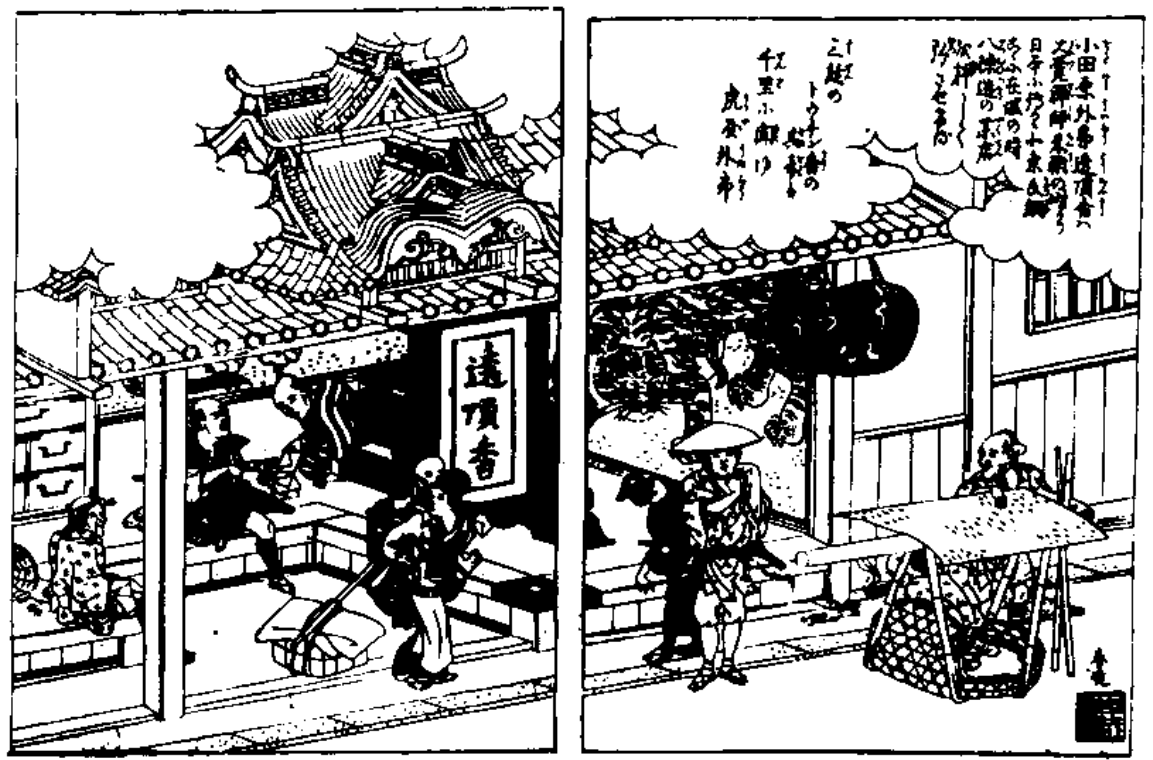
参考文献 鮫島近二『明治維新と英医ウィリス』、石橋長英・小川鼎三『お雇い外国人』九

ウィルソン Olof Eriksson Willman
生没年不詳 スウェーデンの海軍士官。一六二三年つるべーストマンランド州ビョルクスタに

牧師の次男として生まれ、四四年大学を中退して陸軍に入り、四七年除隊してオランダに渡り、この年オランダ東インド会社に雇われて、オランダ船エレファント号でバタビアに渡った。一六五一年(慶安四)七月、出島商館長として赴任するファン・デル・ブルフ Adriaen van der Burgh に随って来日、江戸参府を行なった。翌五二年十二月バタビアに帰り、五三年一月辞職し、五四年七月ストックホルムに帰った。五五年三月海軍に入り、艦長に昇進した。その間いくつかの旅記を書き、死後 Een kort Beskrifning Uppå Trene Resor och Peregrinationer samt Konungariket Japan (1667). (三つの旅行と遍歴ならびに日本王国についての略記) が出版された。その内日本関係の部分の邦訳に尾崎義訳『ヴィルマン日本滞在記』、『新異国叢書』六がある。

(金井 圓)

ういろ 外郎 葉の名。室町時代に亡命した元人医陳外郎(陳宗敬)の子孫が京の西洞院に來住し製造販売した丸葉。「透頂香(とうちんこう)」が正名。阿仙葉製剤で、主に消化器疾患に用いられるが、口中清涼にもなり、万金丹などと似た処方である。小田原のそれは、北条氏のころ一族が下向し、虎屋宇野藤右衛門と称して北条氏の御用商人となり製造販売し、しばしば甲州方面に行商、また日光山の門前町で独占販売権を与えられたりして盛業だった。特に江戸時代に有名になったのは、東海道筋で道中薬としての地の利を得ていたのが条件の一つで、これは草津在梅ノ木や大森の「和中散」などと対比される。また享保三年(一七一八)正月、二代目市川団十郎が江戸森田座で外郎売に扮し、長広舌をふるって大喝采を博し、歌舞伎狂言十八番の一つとして同家の御家芸となり、その姿が錦絵にもしばしばなり、これによって江戸の庶民に親しまれるなど、宣伝上手な点もみのがせな



外郎店舗（『東海道名所図会』五より）

い。↓陳外郎（ちんういろう）

【参考文献】黒川道祐『雍州府志』六（増補）京都叢書三三、『北条記』二、清水藤太郎『日本薬学史』、杉山茂『中世薬師の活動―陳外郎とその周辺―』（『薬局の領域』五ノ八・九）

・一二

（宗田 二）

ういろうし 外郎氏 陳宗敬の後裔で、室町時代以来、医者として活躍し、また「透頂香」の製造販売を行う。宗敬は元朝に仕え、礼部員外郎であったが、元朝の滅亡とともに日本に来て帰化し、博多で医を業とした。その子大年は、応永の初め京都に上り、のち明に使用して透頂香を伝えた。子孫は代々外郎を称し、透頂香は外郎の薬ともいわれた。大年の曾孫に定治がいたが、永正元年（一五〇四）、北条早雲の招きに応じて、小田原に下向した。このころ定治は宇野氏を称したが、北条氏から厚遇され、透頂香についての独占権を与えられた。江戸時代を経て、その子孫は今も小田原に住している。

【参考文献】『陳外郎家譜』（佐脇 栄智）

ういん 右院 明治四年（一八七二）七月二十九日の太政官職制章程で、太政官に正院・左院とともに右院が置かれた。正院の事務章程では、施政（行政）の事務はその章程に照らして右院より上達せしめ、正院これを裁制すであった。右院の職制では、諸省長官・次官（卿・輔）当務の法案を草し諸省の議事を審調するを掌るとあり、右院事務章程では、右院は各省の長官当務の法を案じおよび行政実際の利害を審議するところであった。また同年九月十五日の右院規則では、集会は隔日とし、事務他省に渉りあるいは正院の決を取るべき件は事大小となく右院の協議を経べきことと定めた。しかるに同六年五月二日の太政官職制章程の改正で、正院の権限を拡大、内閣議官としての参議の地位を強化するとともに、右院は各省長官・次官各当務実際の可否を議する所とし、勅命をもって臨時にこれを開くと定め、従来の右院の権限は大きく縮小された。そして実際にはほとんど活動せずに同年四月十四日の布告で右院は左院とともに廃された。

【参考文献】稲田正次『明治憲法成立史』上

（稲田 正次）

ウイン Thomas Clay Winn 一八五一—一八三二 米国長老教会在日外人宣教師。一八五一年六月二十九日米国ジョージア州に生まれた。ユニオン神学校卒業。すでに渡日していた最初の宣教師ブラウン S. R. Brown は伯父で、その感化を受け明治十年（一八七七）来日、十二年石川県中學校師範学校の外人教師となった。十四年任期を終えたのちもそのまま三十一歳まで金沢にとどまってキリスト教伝道につとめ、孤児院、愛育学校（北陸学院の前身）を設立し、同地にキリスト教の地盤を築いた。その後同年から三十九年にかけて大阪に伝道し、折から日露戦争後遼東半島、満洲の

伝道を計画せる日足信亮らに要請されて大連に赴き、大正十二年（一九二三）まで大連・奉天・旅順・沙河口・新義州・撫順・長春における教会（日本基督教教会派）の設立、伝道に尽力した。隠退後来日し、昭和六年（一九三一）二月八日金沢で死去した。七十九歳。

【参考文献】中沢正七編『日本の使徒』トマス・ウキン伝、佐波亘編『植村正久と其の時代』三

（大内 三郎）

ウインクラー Heinrich Winkler 一八四八—一九三〇 ドイツの比較言語学者。カストレン（フィンランドの言語学者）が「アルタイ諸語の人称接辞」（一八六二年）のなかで、フィンノウグル語、サモエド語、モンゴル語、満洲・ツングース語、トルコ語の人称接辞を比較して系統関係を論じてから、欧州ではそれに刺激されてウラル（フィンノウグル、サモエド）、アルタイ（モンゴル・ツングース・トルコ）学説が盛んとなり、その同系を擁護した学者の一人がウインクラーである。日本語をウラル・アルタイ系の言語と考え、特にフィン語と関係が深いと見た（ハンガリーのプレーレも日本語をウラル系言語に近いと見た）。ウインクラーのウラル・アルタイ説は主としてタイポロジー・シンタクスの類似点に重きをおき、形態論や音体系における実質的合致の証明にまでは進まなかった。藤岡勝二は一九〇二年（明治三十五）九月ブレスラウでウインクラーに会い影響を受けた（『国学院雑誌』一四ノ八）。『ウラル・アルタイ諸民族と言語』（一八八四年）、『ウラル・アルタイ語族、フィン語と日本語』（一九〇九年）などの著書がある。

（村山 七郎）

ウインチェスター Charles Alexander Winchester 一八八三—イギリスの外交官。一八四一年海軍軍医補に任命。四二年中国に渡り、はじめ香港居留地の医官をつとめ、廈門（アモイ）・寧波（ニンポー）など各地領事館に

勤務したのち、五五年広東駐在副領事に任命。文久元年二月（一八六一）三月箱館駐在領事に任命され、翌二年十月（六二年十二月）神奈川駐在領事に転じた。その間オールコックの帰国後、同二年二月（六二年三月）から四月（五月）まで二ヵ月間、代理公使をつとめたことがあった。神奈川駐在領事として勤務中、同三年末（六四年初め）から翌元治元年初めにかけて幕府の生糸貿易制限の強行にさいし、しばしば神奈川奉行と交渉した。オールコックの再度帰国後、元治元年十一月（六四年十二月）から翌慶応元年閏五月（六五年七月）まで、再び代理公使をつとめた。その間、慶応元年四月（六五年四月）下関償金の三分の二を免除する条件として、（一）一八六六年一月一日よりの兵庫開港、（二）条約勅許、（三）輸入関税軽減を本国政府に提案し、やがてその承認を得た。一八六五年三月上海駐在領事に転じ、七月同地に赴任した。一八八三年七月十八日没。六十三歳。

【参考文献】『横浜市史』二、沼田次郎編『幕末駐日英国外交使臣略歴並ビニ在日英国外公使館領事館一覽』、石井孝『増訂明治維新の国際的環境』

（石井 孝）

ウースン 吳淞 Wusung 中国江蘇省にある港。揚子江の江口に近い南岸の、支流黄浦江との合流点に位置する。もと宝山県に属していたが、一九五九年上海市に編入された。上海の中心街から北東二〇キロの距離にある。吳淞は元来川の名で、吳淞江は蘇州河とも呼ばれ、太湖に発源して北東流して上海に至り、黄浦江に注ぐ。吳淞江口にはすでに明初三八六年に千戸所を置き、土城を築いて倭寇の侵入に備えたが、その後、中国南東の門戸として次第に重きを加えた。清末一八八〇年ドイツと約して船舶の停泊を許可し、さらに八六年には貿易港となり、上海の外港として発達した。また、一八七四年に上海との間に、

中国最初の鉄道である淞滬(しょうこう)鉄道一七^キが敷設された。沿線には造船所・紡績工場・発電所などが集まる。上海の防衛のため、堅固な防備を施した呉淞砲台が築かれ、一九三二年および三七年の上海事変の際、中国軍は呉淞砲台によって激しい抵抗を行なった。

(織田 武雄)

ウーヌ U Nu 一九〇七ー ビルマ連邦共和国の政治家。一九〇七年五月二十五日、下ビルマ、ミャウンミャ県に生まれる。二九年ラングーン大学卒業後、下ビルマ、マウビン県の公立高校に赴任、三一年結婚。三四年退職し、ラングーン大学に再入学し法学を修めた。ドバマリアシアヨン(一名タキン党)に入り、タキンスと称す。三五年同大学学生自治会委員長に選ばれ、三六年の学生ストライキを指導した。三九年友好使節団の一員として訪中。四〇年投獄、四二年日本軍の侵攻により釈放、日本占領下でバモー政府の外相となる。戦後反ファシスト人民自由連盟A.F.P.F.副総裁、制憲議会の議長となり、四七年十月首席代表として独立協定をイギリスと調印し、四八年一月独立とともに初代首相。五二年ウーヌと称す。のち数回首相に就任。六二年三月ネウインのクーデターによって拘禁され、六六年釈放。六九年四月出国を許され、タイでネウイン政権打倒のため軍事政勢を行なったが不成功に終る。現在はインドに滞在している。著書に「Burma under the Japanese: The People Win through again」。

【参考文献】 Richard Butwell: U Nu of Burma.

(萩原 弘明)

うえ 上 天皇を称する語。天皇の尊貴を称える意味をもち、漢字では「上」の字を充て用いる。『枕草子』に「朝餉のおまへにうへおはしますに」とあるのは、その一例である。また漢語としての「上」も同義に用いられ、

『続日本後紀』承和元年(八二四)二月甲午条に

「上始御射場」のごとき用例がある。「上様」「いまのうへ」「雲の上」「主上」「皇上」「聖上」「今上」は、この語の成語で、「いまのうへ」「今上」はともに当代の天皇の意であり、「いまのうへ」も源氏の御腹にてもものし給(『増鏡』一一)、「右件厨子(中略)天皇伝賜今上、今上謹献(盧舎那仏)」「東大寺献物帳」などの用例がある。「うえ」はまた天皇を称するほかに、天皇の御座所の近辺をいい、あるいは将軍・公方・殿様や貴人の妻の意にも用いられ、また「上様」は特に將軍を指すほかに、家臣よりその主君を称するのにも用いられた。

【参考文献】 帝国学士院編『皇室制度史』六

(武部 敏夫)

うえ 釜 ↓うけ

ウェーバー Karl Ivanovitch Waeber 生没

年不詳 帝政ロシアの外交官。中国名は韋貝。北京公使館書記・天津領事となり、一八八四年、朝露修好通商条約を結ぶために朝鮮に赴き、翌年、代理公使兼総領事となった。当時甲申政変をきっかけとして朝鮮をめぐる国際関係が紛糾していた。かれは朝鮮宮廷に接近し、イギリスの朝鮮進出の阻止に努力し、ロシア勢力の拡大をはかった。九四年、駐清代理公使に転任したが、『東洋の乱』で国際関係が緊迫すると直ちに復任し、日本に撤兵を勧告した。日清戦争のちは、三国干渉の勢いに乗じて朝鮮国界に親露勢力を拡大し、九六年には朝鮮国王を王宮から誘い出してロシア公使館にうつした。以後、ロシアの勢力は一段と伸張したが、やがて朝鮮支配について日露両国間に協商が行われ、同年、日本公使小村寿太郎とウェーバーは覚書を交換した。その結果、翌九七年、国王は王宮にもどった。同年、ウェーバーはメキシコ駐劄公使に転出した。↓小村・ウェーバー協定(こむら・ウェーバーきようてい) (旗田 龜)

うえかきすい 上河淇水 一七四八一八



上河淇水画像

一七 江戸時代後期の心学者。諱は正揚、通称應蔵。寛延元年(二七四八)十一月九日近江国神崎郡今田居(滋賀県八日市市今代)の士族志賀家に生まれ、のち京都の手島堵庵に養われてその嗣となり、堵庵の母の生家上河氏を名のった。義兄手島和庵のあとを承け寛政三年(二七九二)明倫舎三世舎主となり、爾後約三十年間全国の心学講舎の統制と門弟の指導に専念、江戸における中沢道二の活躍と相まって石門心学の黄金時代を招致した。淇水は心学者の中ではもっとも漢学の素養が深く詩文をもよくしたが、その師石田梅岩や堵庵の学問をもって堯舜以来孔孟を経て朱子に至る聖学の正統を正しく伝えたものと信じ、かつそれを世に示すために、『心学承伝之図』ならびに『聖賢証語国字解』を著わした。しかし、それは神儒仏三教に自由に出入して「一モ舎ズ一ニ泥ヌ」ことを特色とした石門心学を朱子学一色に偏せしめることとなり、江戸の心学者たちから反対された。文化十四年(一八一七)十月四日七十歳で没した。京都鳥辺山延年寺の墓域に葬られた。

【参考文献】 『上河淇水先生事蹟』

(柴田 実)

うえきいち 植木市 植木店(うえきだな)ともいう。一般には社寺などの縁日に植木・盆栽・草花などを並べて売る市のこと。特に江



茅場町薬師堂植木市(『江戸名所図会』一より)



阿弥陀池植木市(玉手堂洲「大坂風景図」)



戸においては日本橋茅場町から坂本町のあたりをさす俗称ともなった。このあたりには植木職人(庭造り・庭木手入れ・植木つくり・植木売りなど)が住んでいた。このような所は浅草(入谷)・湯島天神裏・麻布飯倉片町な



植木枝盛

どももあり、のち明治以後になると入谷の朝顔、駒込や三崎の菊、染井のつつじや水仙、巢鴨の桜草が知られ、四谷・目黒なども有名であった。大阪では北堀江の和光寺阿弥陀池の灌仏会に植木市がたつ(四月八日)。「よよわかび」と称した。二月十五日の涅槃会に際してもたつ。(宮本 又次)

うえきえもり 植木枝盛 一八五七—一九二七 明治時代前期の自由民権家。安政四年(一八五七)正月二十日に高知藩士の家に生まれ、藩校致道館で漢学等を学び、明治七年(一八七四)板垣退助の演説をきいて政治思想に目を開いた。同八年東京において明六社・三田演説会・キリスト教会などに出入りして、近代西洋思想を学び、次第に民権論者として活動し始めた。九年『郵便報知新聞』に投じた文章が官憲の忌諱にふれ、禁獄の刑に処せられたが、かえって民権の志を強くし、十年高知に帰って立志社に加わり、立志社建白書の草稿起草した。十一年に各地方遊説の途にのぼり、ついで、自主的民権会として設立された土佐州会の議員に選ばれ、地方自治の確立に尽力した。同年から十三年にかけ、愛国社の再興、国会期成同盟の結成などに参加し、十三年末の有志による自由党結成、十四年の政党としての自由党結成にそれぞれ参画した。その間これらの組織関係の重要文書の起草にしばしばあたったが、特に十四年夏立志社草案として起草した私擬憲法「日本国憲案」は、

この前後に官民間で相ついで作られた数十にのぼる憲法草案のなかでも、もっとも徹底した民主主義の精神を示している。十四年十一月全国の酒造人に檄文を送り、翌年五月には官憲の禁をわけて京都で酒屋会議を開き、増税反対の議決を行わせた。植木は早くから板垣のブレーンであった関係上、自由党ではいわゆる土佐派の一人として行動したが、十七年には村松愛蔵のために檄文を草し、のちに飯田事件の蜂起の檄文に用いられており、土佐派の域をはみ出していたと見られるふしもある。十七年自由党が解党すると、高知に帰り、十九年から二十一年まで高知県会議員として県政民主化のために力をつくすたわら、婦人解放・風俗改良など、従来の政治運動よりはさらにはばの広い啓蒙運動を開始した。二十三年愛国公党の創立にあずかり、第一回衆議院議員総選挙に立候補して当選したが、二十四年三月の第一回帝国議会で、いわゆる土佐派二十九議員の一人として予算案に關し民権を裏切る行動に出て、自由党を脱会した。同年十二月第二回議会で衆議院が解散されたのち、自由党に復帰したが、その直後に発病し、二十五年一月二十三日東京で没す。三十六歳。他殺の疑いがある。少年時代より文筆に長じ、民権派の機関紙『愛国志林』(のち『愛国新誌』)『高知新聞』『土陽新聞』などを主宰し、数多くの論説で紙面をかざったほか、『民権自由論』『民権自由論二篇中号』『天賦人權弁』『一局議院論』『報国纂録』『東洋之婦女』などの単行著作もある。板垣退助の論を筆記したという名で公にされた『無上政法論』も、植木の著作とみてよく、世界政府による軍備全廃をめざす珍しい着想を示している。『民権数へ歌』や『自由詞林』など、民権思想を詩歌に表現した作品もあり、口語体の駆使と相まち、文芸史にも足跡をのこした。また日記として『植木枝盛日記』がある。

〔参考文献〕 家永三郎『植木枝盛研究』、外崎光広『明治前期婦人解放論史』

(家永 三郎)

うえきえかのたたい 植木坂の戦い 西南戦争(せいなんせんそう)

うえきえだか 上木高 鹿児島藩統治下の全領域に行われた小物成の一種。琉球では「ウキ高」と訓む。古くは現物納で、のちには田高並みの定代とし真米で納め、享保十三年(一七二八)には田高押入になっている。しかしその後の規定にもしばしば現物納の額が示されており、現物納も後々まで併用された。桑一本に付真綿一匁五分、櫛(うし)一本に付漆一匁二分(元禄以後は櫛が多く出る)、唐芋地一步に付唐芋十二匁、櫛一束に付皮櫛五百匁、同一釜に付紙二百四十八枚(量目一貫六百匁)、茶百匁に付三十三匁三分などが納額である。なお上木高に類するものに浦屋敷一畝に付棕櫚一本と定め、棕櫚皮八枚(代銀四匁)の納がある。享保以後の検地帳には桑・茶・櫛・櫛・柿・柴竹のみを記すが、それ以前のものには椿・梅・桃・梨・枇杷・金柑・橙・九年母などまで載せ、見掛三分の二の納で、いずれも定値があり代銀納を認めた。

〔参考文献〕 『鹿児島県史』二、『大御支配次第帳』、『租税問答』、『薩藩例規集』二二三、藩法研究会編『藩法集』八、東恩納寛惇『南島風土記』(原口 虎雄)

うえきのしょう 植木荘 (一)筑前国糟屋郡の荘園。現在の福岡県粕屋郡須恵町植木付近。

植木荘とも書く。成立年代不明。平安時代末期すでに石清水八幡宮領として別当田中坊に荘務が執行されたが、本来は筑前宇美八幡宮領六箇荘の一つとして成立したらしい。のち田中家より分かれ宇美宮検校職を相伝した房清の系統(宇美宮家)に伝わった。史料的には大永二年(一二二二)を以て荘名は消えるが、室町時代より守護大内氏配下の在地土豪層に

よって支配され荘園の機能を失っていた。

〔参考文献〕 清水正健編『荘園史料』下、『石清水文書』、『石清水八幡宮史』五

(二)筑前国鞍手郡の荘園。現在の福岡県直方市。遠賀川・犬鳴川合流地点に位置する。成立年代不明。十二世紀藤原頼長家領としてみえ、保元の乱後没官されて院領となり、のち後鳥羽天皇の母七条院に伝わった。安貞二年(一二二八)、後鳥羽の妃修明門院へ譲与、これよりさらに猶子四辻宮善統親王に伝え、以後南北朝時代まで四辻宮家が本家職を伝領した。鎌倉時代、領家は七条院法華堂門跡に相承されたが、その後は明確ではない。

〔参考文献〕 清水正健編『荘園史料』下、『南禅寺文書』上、『福岡県史』二下、『直方市史』上、帝室林野局編『御料地史稿』

(恵良 宏)

うえきぶぎょう 植木奉行 ↓作事奉行(さくじぶぎょう)

うえきもん 右掖門 ↓掖門(えきもん)

うえこみ 植込 庭園内に樹木を集团的に配植すること、また植えた場所をいう。自然風な植栽では高さを三段階にしたり、平面的にも三本または三群の二等辺三角形を使った配置を基準としている。周辺の建物などをかくしたり、防風・防火のために植栽することもある。『作庭記』では石組について詳しく説明されているのに比較してきわめて簡単に述べたのは、茶庭に關係があつて、すべての庭園に普遍化することはない。(田中 正六)

うえさきくはちろうじょうしよ 植崎九八郎上書 寛政の改革期に小普請組植崎九八郎が書いた幕政についての意見書。天明七年(一七八七)七月付となっている。松平定信の老中就任の直後に書かれたこの書は、田沼意次のもとで志を伸ばすことのできなかつた幕臣の立場から、寛政の改革が課題としなければな

らない諸問題を鋭く指摘している。内容は、年貢公役軽減論・綱紀肅正論・物価論・消費抑制論で成っている。年貢公役の軽減については為政者が仁政を布くことを強調し、仁政とは年貢課役の軽減であると、当時の年貢政策のありかたを追求している。綱紀肅正論では人材の登用を中心とした公正な人事を強調する。物価論では物価の高騰、錢価の下落を指摘するが、具体的な対策には触れていない。消費抑制論では、田沼期の生活の向上から生まれる諸現象を非生産的であると攻撃し、江戸への人口集中は農業人口の減少の裏返しと見て「人返し」を主張する。最後に、こうした問題が生じたのは、田沼意次の「取りはかりい悪しく、本意おろそか」にした結果である、田沼政治を攻撃する。当時の不平等知識人層がいだいた松平定信への期待の一表現であったろう。したがって、その期待が十分に実現されなかったときに、その不満は松平定信攻撃に向けられる。のちに植崎九八郎が書いた『賤策雑収』では、定信のとった政策が批判されている。刊本として『日本経済大典』二〇に収められている。

【参考文献】伊藤好一『植崎九八郎上書』について(過程)一〇 (伊藤好一)

うえさねかず 上真葛 一二三二一八八 鎌倉時代の雅楽家。雅楽の流派の一つ、奈良方に属する伯(こま)氏の出身。上家の始祖。貞永元年(一二三二)生まれ。幼名真福丸、元近葛、実葛。『教訓抄』の著者伯近真の三男、甥は『続教訓抄』の著者伯朝葛。竜笛および左舞を専門とし、興福寺など奈良を中心とした寺院・神社で演奏、時には宮廷に召されて演奏にあたった。昇進して従五位下右近将監(一説に従五位上左近将監)に至り、正応元年(一二八八)五月二十日没す。五十七歳。

うえさねみち 上真行 一八五一—一九三七 (蒲生美津子)

明治時代から昭和時代前期にかけての雅楽家、作曲家。雅楽の流派の一つ、奈良方の上家の出身。代々笛を専門とする。嘉永四年(一八五一)七月二日、京都に生まれる。はじめ、真裕(さねみち)と称した。号夢香、別に善愁人。父は真節(さねたけ)といひ、竹澤と号した。母は小泉愛子。明治七年(一八七四)東上を申し付けられ、雅楽局の伶人として皇室およびそれと関係する寺院などで雅楽演奏に従事、昇進して大正六年(一九一七)には楽長となる。この間、明治の初期の洋楽輸入に際してはその伝習も受け、なかでもチェロを得意とし、日本最初のチェロ奏者ともいわれる。また作曲の才能にもすぐれ、『鉄道唱歌』「一月一日」など多数の唱歌を作曲した。明治十四年からは洋楽教育機関である音楽取調掛の教官としても勤務。中学校・高等女学校などの音楽教員検定試験官や講師を勤めて教育にも熱心であった。大正九年には正倉院楽器の調査研究も行い、明治・大正・昭和にわたって幅広く音楽活動を行なった。このほか漢詩をよくし、能筆家でもあった。昭和十二年(一九三七)二月二十八日死亡。八十七歳。

【参考文献】水原渭江『近世宮廷音楽家の年譜』(雅楽研究)二 (蒲生美津子)

うえさま 上様 中世・近世における貴人に對する尊称。男女ともに用い、「かみ」ともいう。『太平記』では、元弘三年(一二三三)後醍醐天皇伯耆臨幸に際して、富士名判官の語として天皇を上様とよび、また建武四年(一二三三)金崎落城に際して、新田義顕の言葉として尊良親王に上様とよびかけているから、天皇・皇族などの尊称として使われ始めたものであろう。室町時代になると將軍を御所様とも上様ともよび(『明德記』)、次第に將軍の尊称となったようであるが、將軍嗣子(御産所日記)、関東公方(鎌倉大草紙)、小弓御所(快元僧都記)などにも用いられ、戦記の類では

戦国諸侯を臣下から上様とよぶ例も多い。一方、『義経記』にみられる「御たち(館・源義経)もかみさま」というような用い方もあり、夫人・御台を上様と称したが、越後守護上杉房能の女を「かみ様」とよんだ例もあり(『越佐史料』三)、必ずしも御台には限られていない。また婦人に限らず、男子も「上様」(『世鏡抄』)と称することがあった。江戸時代になると徳川將軍の尊称となり、諸大名らは將軍のことを「上(うへ)様」といい、將軍の夫人は將軍のことを「お上(かみ)」といったという。

【参考文献】『武家名目抄』称呼部五上・二二下・二二上(『新訂増補』故実叢書)一三 (進士 慶幹)

うえしじょう 羽衣石城 鳥取県東伯郡東郷町の羽衣石にある。山城。南条城ともいう。

貞治五年(一二六六)伯耆の土豪南条貞宗がこれを築いた。『伯耆民談記』に「山上を本城とし麓の周りに侍の小道を配置し、大手は長和田(なごうた)表にて、惣構に堀をほり、其内に町屋を建並べ(下略)」とあり、天険による要害であった。貞宗は塩冶(佐々木)高貞の次男で越前国南条郡で成長、南条氏を称して伯耆に所領を得、羽衣石城を本拠として守護山名氏に属し、文明年間(一四六九—一四七二)に至って大いに台頭した。大永四年(一二三四)雲州尼子経久の攻撃にあつて落城(いわゆる「五月崩」といふ)、城主宗光は因幡に奔り、代わって尼子国久が入った。天文九年(一五四〇)宗光は城の奪回をはかるも成らず、永祿のころ、毛利氏が尼子を降すに及んでようやく羽衣石城に帰ることを得た。以来天正のころまで毛利氏に従ったが、天正三年(一五七五)春、宗勝(宗光)が出雲富田城に吉川元春を訪ねたあと病臥して死没すると、嗣子元統(もとつぐ)は深く吉川・毛利氏を怨み城に拠って背いた。同七年七月一旦落城して逃れるが八月には再び奪回した。この後豊臣秀吉に属し、同十

年秀吉と毛利輝元の講和が成立するや南条元忠は羽衣石城主として伯耆東部の三郡(河村・久米・八橋)の支配を秀吉に許され、その勢威大いに振るった(西部三郡は吉川広家が領有)。しかし慶長五年(一六〇〇)関ヶ原の戦いに西軍に属したため、元忠は陣没、南条氏はここに滅びた。城址の山頂は広く、現在、南条氏の後裔の建てた鉄筋トタン葺の天守閣がある。山名は古くは崩岩山といったが、南条氏築城の際、それを忘れて羽衣石の山と改めたという。

【参考文献】『日本城郭全集』一一、山中寿夫『鳥取県の歴史』(県史シリーズ)三二 (金本 正之)

うえしふ 右衛士府 右衛士府(えしふ)

うえしまおにづら 上島鬼貫 一六六一—一七三八 江戸時代中期の俳人。寛文元年(一六六一)四月四日、上島宗春の第三子として伊丹に生まれる。名は宗邇(むねちか)。通称与惣兵衛。俳号は鬼貫のほかに、点也(てんや)・自春庵(じしゅうあん)・囉々哩(らりり)・犬居士・馬楽童・仏兄(さとえ)・槿花翁(のち金花翁)など多い。伊丹は近世初めから酒都として繁栄し、百般の諸芸が流行したが、その中で俳諧は最も大きな分野を占めた。鬼貫はその環境の中に生まれたから、八歳ではやくも句を作ったといわれる。はじめ貞門の松江重頼につき、やがて談林の西山宗因入門し、またそのころ重頼門下の池田宗旦が京より伊丹に移って也雲軒という俳諧学院を作ったので、それにも出入りして俳諧を研鑽した。しかし若くして俊敏な鬼貫はこうした伊丹風の放蕩な句がはたして詩であるかに疑問を抱き、『俳道惠能録』(延宝八年(一六八〇))なる一書を公刊して当時世上の俳諧を看破し、伊丹を去って大坂に独居し、沈思黙考を重ねた。居ること五年、すなわち貞享二年(一六八五)春(二十五歳)、「まことの外に俳諧なし」の悟

りを得たのである。これは藤原公任の『新撰
髓脳』の歌論にも一致するが、この開悟の基
盤が『六祖法宝壇経』の「菩提本無樹 明
鏡亦非台、本来無一物 何処惹塵埃」の偈
にあることは明白である。無一物の大悟から
誠が生じるのである。鬼貫の名著『独こと』
〔享保三年成〕に誠の俳諧について説明して
「句を作るに、すがた詞をのみ工みにすればま
ことすくなし、只心を深く入れて姿ことばに
かゝはらぬこそこのまじけれ」と教えている。

一方、三池侯・郡山侯・大野侯に出仕したの
は武門志願のためである。あくまで俳諧によ
って食資を求むることを潔しとしなかった。
だから孤高の詩人である。元禄十八年（一七〇
三）伊丹の家を払って京に出て、俳諧を励んだ
が享保三年（一七一八）に病のため大坂に隠棲
し、ついに元文三年（一七三八）八月一日、七十
八歳で没した。大坂の天王寺六万休町鳳林寺
に葬し、伊丹の墨染寺には分墓がある。世人
は「芭蕉は修得の達人、鬼貫は生得の達人」
というが当を得た評である。『鬼貫全集』増
補版全一巻（昭和四十六年）がある。

（岡田利兵衛）

うえしろきり 植代切 水田耕作の用語。本
田作業における耕起から田植に至るまでの作
業過程には、粗代（荒代）・中代・植代の三段
階がある。植代は田植の数日前から田の水加
減をよくし、田の全面を馬にひかせた犁す
きで浅く縦横に何べんも細かく犁くか、鋤で
よく切るかして、土を細かにする碎土作業の
ことで、植代犁・かい田犁・小切ともいう。
『私家農業談』には「植代犁はさのみ深く犁は
宜からず、浅くとも土よくねばる様にこまか
に犁がよし、馬一疋して大概一日に四度程も
犁ものなり、又、馬持ざるもの或は至て地深
の馬の入らざる深沼は、鋤にて能切るなり、
故に小切ともいふなり、但、鋤にて小切には
農夫一人して一日に三百六十歩程切る事な

り」とある。『耕稼春秋』では、田植の二三日
前に植代犁をし、そのあとを鋤でならし、次
に馬肥で十文字にかき、植付糞を入れ、その
上また鋤で小ならしして苗を植えるという順
序になる。つまり植代切のあとは鋤でならし
続いて馬肥で代掻をするのである。 ↓代掻
（しろかき）

【参考文献】『百姓伝記』（『岩波文庫』）、古島
敏雄『近世日本農業の構造』（『古島敏雄著作
集』三）、同『日本農業技術史』（同六）

（三橋 時雄）

うえすぎあきさだ 上杉顕定 一四五四―一
五一〇 室町時代後期の関東管領。四郎、民
部大輔、右馬頭、可諱と号し、四郎入道とも
呼ばれた。享徳三年（一四五四）、越後守護上
杉房定の次男として生まれたが、関東管領上
杉房顕の養子となり、文正元年（一四六六）二
月十一日、房顕が武蔵国五十子の陣（埼玉県本
庄市）で没すると、十三歳でそのあとを継い
だ。顕定が生まれた享徳三年に関東公方足利
成氏（しげうじ）は管領上杉憲忠を誅殺し、こ
れを発端として関東の擾乱が開始され、関東
公方と管領上杉方の長期にわたる攻防のな
かで、戦線が固定化し、公方成氏は古河（茨
城県古河市）を拠点として東上野・下野・下
総を抑え、上杉方は西上野・武蔵・相模を掌
握し、両者はほぼ利根川をはさんで対峙し合
っていた。この時点で顕定は、幕府や越後上
杉氏の援助を得て、武蔵五十子の陣の上杉方
の総帥として管領に就任した。文明三年（一
四七二）六月に顕定の部将長尾景信らが、古
河城を攻撃し成氏を一時下総に没落させてい
る。しかし同八年六月に、顕定の家臣長尾氏



上杉顕定花押

の内紛から、長尾景春が反乱をおこし、鉢形
城（埼玉県大里郡寄居町）から五十子の陣を襲
い、これによって長期にわたる五十子の陣は
崩壊し、翌年正月顕定は上野の那波に逃れた。
景春は成氏と結び、上杉方と対立したが、同
十年一日顕定と成氏は和睦し、やがて幕府と
成氏との和睦に発展した。長享二年（一四八
八）から永正元年（一五〇四）にかけては、顕
定は扇谷上杉氏の定正およびその養子の朝良
と対立した。相模実時原・武蔵菅谷原・武蔵
立河原・武蔵河越城（埼玉県川越市）などで合
戦が行われ、北条氏・今川氏などが扇谷上杉
氏を援助し、越後守護上杉房能（顕定の実弟）
は守護代長尾能景を関東に派遣して顕定を救
援した。以上の十五世紀後半の半世紀にわた
る断続的な戦乱の過程で、上杉氏の権力は衰
退に向かう。上杉氏の権力基盤は、被官の総
社・白井・足利の三長尾氏と上州一揆といわ
れる西上野を中心とした在地領主集団であっ
たが、白井長尾景春は、顕定の命に従わず、
東上野の新田荘の由良横瀬氏や上州一揆の
旗頭の長野氏の独立的傾向が著しくなった。
顕定はこの衰勢を越後の軍勢力で補っていた。
顕定は西上野の平井城（群馬県藤岡市）を本城
とし、東山道筋の碓氷川沿岸の八幡荘群馬
県安中市）を南北朝時代の上野入部以来の本
拠地として抑え、西上野・武蔵の在地領主層
を掌握していた。八幡荘板鼻には菩提寺の海
竜寺があり、文亀二年（一五〇二）八月に顕定
は老母の十三回忌の仏事供養を盛大に営んで
いる。永正四年八月越後守護上杉房能がその
養子定実を擁した守護代長尾為景に越後国頸
城郡天水（新潟県東頸城郡松之山町）で攻殺さ
れると、顕定とその子憲房は報復のために同
六年七月上野・武蔵の兵を率いて越後に進攻
し、為景を越中に追い落とし、みずからは府内
（新潟県上越市）にとどまって越後の支配を行
なった。しかし信濃の高梨政頼らの国人が蜂



（伝）管領塚供養塔

起して、長尾為景を擁して越後に攻め入り、
一月余の戦いの末、同七年六月二十日越後国
魚沼郡長森原（新潟県南魚沼郡六日町）におい
て顕定は敗死し、憲房は上野に逃げ帰った。
五十七歳。法名海竜寺可諱皓峯。

【参考文献】『大日本史料』九ノ二、永正七
年六月二十日条、高橋義彦編『越後史料』
三、渡辺世祐『室町時代史』、峰岸純夫『東
国における十五世紀後半の内乱の意義』（『地
方史研究』一三ノ六）、羽下徳彦『越後に於
ける永正―天文年間の戦乱』（『越後研究』
一七）

（峰岸 純夫）

うえすぎあきふさ 上杉顕房 一四三五―五
五 室町時代前期の武将。扇谷上杉持朝の子。
永享七年（一四三五）生まる。幼名三郎。修理
大夫、弾正少弼。宝徳元年（一四四九）、父の
持朝は、顕房に家督を譲って武蔵国河越城（埼
玉県川越市）に隠退、顕房は家宰の太田資清
（道真）とその子の資長（道灌）に補佐された。
翌二年四月、父とともに足利成氏を江ノ島に
攻め、相模国七沢・糟屋に拠り、十月鎌倉に
帰った。さらに成氏が享徳三年（一四五四）十
二月、若い山内上杉憲忠を急殺したため、成
氏と両上杉氏の争いはついに勃発し、関東は
大混乱となった。康正元年（一四五五）正月、
武蔵野で成氏方と両上杉方の合戦が行われた。
合戦は、正月二十一日と二十二日が特にはげ
しく、立河原（東京都立川市）・分倍河原（同